



金澤翔子「令和」揮毫・金澤泰子講演会

6月2日(日)、セラトピア土岐で金澤翔子さんの揮毫(きごう)と、母親の泰子さんの講演会「ダウン症の娘と生きて」がありました。一昨年、私は東京・上野の森美術館に彼女の書展を観に行き、お母さんのお話も聞いているので、今回は2回目となります。翔子さんとお母さんのやりとりを見ながら、そして泰子さんのお話を聞きながら、<人は何のために生まれ、何のために生きていくのか>という根源的な問いの答えを示唆してくれているように思いました。

42歳でやっと産まれた子どもに障がいがあり、今の時代と違い、そのことをしばらくは隠して生きてこなければならなかった苦しさについて(今回はあまり話されませんでした)、**「日本一不幸な母親だ」**と日記に書かれたそうです。



小学校との意見の食い違いから親子で家に引きこもっていたとき、娘が母を真似て書写した経典を見て、涙してくれる人がいたことの不思議について語られました。**「知的障がいに恵まれて、純度の高い魂をもっている。ひるぎない優しさがある。その感受性の純粋さが伝わるのだろう」**と。「知的障がいに恵まれて」という言葉にドキリとしました。もちろん今だから言える言葉でしょうが、何が人にとって幸せなのかを考えさせられます。

娘が小学校に行ってみんなと一緒に走ったとき、うまく走れない姿を見て初めて娘が生きている意味を感じたと言われました。**「ビリという役目がある」**。娘がいることによって他の子が生きる、ということでしょう。とてもつらい言葉にも聞こえますが、その前向きな見方が**「闇の中には必ず光がある」**という信念につながっていきます。

ダウン症であるということで**「苦しかったのは親の私で、翔子はそんなことを考えていなかった」**。娘が自分の人生を楽しく生きているということに気づいたとき、母親として考え方が変わったようです。**「翔子は競争心がない(他人と比べない)から幸せになれる」「うらやんだりねたんだりしないから、いつも無心」「みんなによろこんでもらいたい、その気持ちだけで生きている」「〈今〉を楽しんでいる」**。その生き方を**「すべてが肯定される世界観」**という言葉でまとめられました。

「いてくれるだけで大成功」という言葉も心に残っています。「日本一不幸な母親」が、「世界一幸せな母親」として活動を続けておられます。